九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資料 山之口獏 ： 「風変わりな人達の『話』の会」

松下, 博文
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/15489

出版情報：文獻探究. 23, pp.78-96, 1989-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

資料　山之口貘

―「風変りな人達の『話』の会」―

松下博文

はじめに

昭和十三年九月、貘は「中央公論」誌上に自伝小説「詩人便所を洗う」を発表する。この小説は当面の窮乏を凌ぐため過去の生活実態を暴露することによって原稿料を得ようという、いわば稿料目当ての私小説であった。反響はすこぶるよかったらしい。やがて文藝春秋社からその奇譚を所望する企画が舞い込む（註8参照）。題して「型破りの珍談奇談　風変わりな人達の『話』の会」（「話」昭14・9月号）という。司会に松井翠聲、出席者に宮坂普九・山之口貘・山形天洋・黒川一・木村太郎の五氏[1]。当代の畸人変人と称される人々を恣意的に選出し一堂に集めての座談会であった。ここに紹介する資料はそのときのものである。内容は取るに足るまい。しかしながら時代の流れの中にこの一片を泛べた場合はたしてそう明言できるか。わたくしにはこの資料は痛烈なイロニーと映る。〈風変わり〉なのは当座の人々ではなかった。むしろ時代であった。

Ⅰ　どもる思想

紙の上

戦争が起きあがると
飛び立つ鳥のやうに
日の丸の翅をおしひろげそこからみんな飛び立った

一匹の詩人が紙の上にゐて
群れ飛ぶ日の丸を見あげては
だだ
だだ　と叫んでゐる
発育不全の短い足　へこんだ腹　持ち上らないでっかい頭
さえづる兵器の群をながめては
だだ
だだ　と叫んでゐる

だだ
だだ　と叫んでゐるが
いつになったら「戦争」が言へるのか
不便な肉体
どもる思想
まるで砂漠にゐるやうだ
インクに渇いたのどをかきむしり熱砂の上にすねかへる
その一匹の大きな舌足らず
だだ
だだ　と叫んでは
飛び立つ兵器の群をうちながめ
群れ飛ぶ日の丸を見あげては
だだ
だだ　と叫んでゐる　（『山之口貘詩集』昭15・12）

昭和六年九月十八日、関東軍参謀は奉天郊外柳条湖の南満州鉄道線路を爆破した。いわゆる満州事変の勃発である。この事変を導火線として上海事変、五・一五事件、二・二六事件、盧溝橋事件、ノモンハン事件などさまざまなクーデターやテロが続発する。以後、太平洋戦争までわが国はその激動の時代を真っ直ぐに暴走してゆくことになる。かかる無謀な暴走行為は、当然、文学の運命も決定した。それは近代文学の輝かしい個人主義の風潮が次第に民族主義的なファシズム体制の波に侵略され政治権力の文化統制の制約の中に包括・統合されてゆく過程でもあった。周知のようにこの方向を最も決定づけた歴史的事件が盧溝橋事件である。

この事件は昭和十二年七月七日深夜から翌朝未明にかけて北平（現在の北京）郊外で起きた。最初は日中両軍の偶発的な射撃事件にすぎなかったらしいのだが二十日後には全面戦争の様相を呈し九月二日にはその名も「北支事変」から「支那事変」と改称され総力戦に入る。このような状況の中で政府は八月二十四日に「国民精神総動員実施要綱」を閣議で決定、九月十三日これを発表する。目的は〈挙国一致〉〈尽忠報国〉〈堅忍持久〉精神の徹底にあった。そして文壇もこの事態にすみやかに対応する。結果的に見ればこの対応が昭和文学史上に国策文学と呼ばれるジャンルを誕生させることになったといってよい。それはまず文学者の現地派遣に始まった。

先鋒をきったのは吉川英治である。吉川は八月に東京日日新聞社から派遣され南口鎮や天津の戦地を観戦。続いて尾崎士郎、岸田国士、榊山潤らがそれぞれ「中央公論」、「文芸春秋」、「日本評論」の各雑誌社から特派された。彼らの従軍ルポルタージュや戦地関連小説が当時の文壇の話題を攫ったのは知られるとおりである。ところで、かような現地報告記の盛況を見た内閣情報部は昭和十三年八月、世にいう「ペン部隊」を漢口攻略戦に派遣することを発表した。同年九月十一日久米正雄を班長とする陸軍部隊がまず出発、後れて十四日菊地寛を班長とする海軍部隊がそれに続いた。浅野晃、尾崎士郎、片岡鉄兵、川口松太郎、菊地寛、岸田国士、北村小松、久米正雄、小島政二郎、佐藤惣之助、佐藤春夫、白井喬二、杉山平助、瀧井孝作、富沢有為男、中谷孝雄、丹羽文雄、浜本浩、林芙美子、深田久弥、吉川英治、吉屋信子、総勢二十二名の部隊であった。その任務に対するメムバーの自覚は出発前に撮影された数葉の記念写真を一眸するだけで少なからず理解できる。たとえば靖国神社に参詣し大鳥居の前で胸を張っている吉川の姿などは責務への自覚とメムバーに選ばれた者の誇りとが体全体に満ち溢れたまさに好個の一葉であろう。[3] しかしこの企画は予想に反しさほど世間の耳目を集めることはできなかった。衆目は火野葦平「麦と兵隊」（「改造」昭13・8）に集中していたのであった。いうまでもなく「麦と兵隊」は火野が報道班員として徐州会戦に従軍したときの従軍日記である。ここには激しい戦闘シーンも兵士の武勇伝もほとんど描かれていない。広大な中国大陸のはてしない麦畑の中を一路徐州へ向かって進軍する兵士たちの様子や周囲のそれが淡々と描かれているのみである。

果しもなく続く麦畑の中の進軍である。陽が上って来ると次第に暑くなって来る。雨が降れば泥濘と化する道は天気になると乾いて灰のようになる。黄色い土煙が濛々と立ちのぼり、煙の幕の中に進軍して行く部隊が影絵のようになったり、見えなくなったりする。赤い旗のついた竹竿を担いだ乗馬の対空班が先頭に行く。その後から騎兵に前後を護衛された部隊本部が行く。数十頭の乗馬隊が粛粛と進んで行くのは絵のごとく、颯爽としたものである。炎熱を避け

させるため、馬は皆菅笠や編笠を被って居る。耳だけ笠に穴を開けて出して居る。手拭を被ったのや、葉のついた気の枝を頭に載せているのもある。駱駝隊に荷物を負わせて、各社の新聞記者が従いて行く。既に連日の行軍で、豆を拵らえ、足取りの香ばしくない者もある。黄塵のため、口の中はざらざらする。歯にあたってがじがじ鳴る。吐くと黄色い唾が出る。汗が淋漓と流れ落ちる。軍服に沁みて透る。流れた汗に黄塵がくっつき、拭うと斑になって、まるで下手な田舎芝居の役者の白粉の剝げた見たいである。兵隊はものも云わず行軍して行く。話しかけても、怒ったような顔をして碌に返事もしない。小休止になると、埃の中だろうが、馬の糞の上だろうが、投げるように仰向けに引っくり返ってしまう。背嚢には何日か分の米を入れた靴下を括りつけてある。背嚢の中にはぎっしり入組品が詰って居るに違いない。弾薬か手榴弾が入って居るだろう。（略）銃は右に担ったり左に肩を換えたりするが、背嚢は下すわけには行かない。胸が緊る。弾ね上げる。一寸楽になる。また肩に喰いこんで来る。兵隊はそれでも何でもないかのような顔をして、進んで行く。黄塵を被り、土人形のようになり、汗に濡れ、歩いて行く。

徐州作戦の主たる目的は徐州に集結している中国軍を華中の中支那派遣軍と華北の北支那方面軍とがそれぞれ南北から包囲しその戦力を破砕させ中国における日本軍の地盤を不動のものにすることにあったといわれる。火野は中支那派遣軍報道班として第十三師団（師団長・荻州立兵中将）の進軍に従っていた。時あたかも初夏の頃、照りつける太陽と濛々と立ちのぼる黄土、麦また麦の中の従軍であった。長期化する戦争。おのずとそれは銃後の国民生活を圧迫する。この年四月すでに「国家総動員法」が公布されていた。国民の徴用・物資の生産配給・物資の収用・輸出入の統制・資本資金の統制などあらゆる方面にわたって政府が勅令により発令できるという内容である。かかる状況の中で文学の国策色はますます濃厚になってゆく。「農民文学懇話会」（昭13・11）「大陸開拓文芸懇話会」（昭14・1）「経国文芸の会」（昭14・10）「国防文芸連盟」（昭15・7）など時局便乗型の文学団体が陸続と結成され始めたからである。まさに主体性を喪失し自由に発語できない〈どもる思想〉時代の到来である。ときに貘はいかなる態度で時局と対決していたか。

Ⅱ　不便な肉体

「だだ、だだ」とはいったいなんだろう。「日の丸を見上げては」「だだ、だだ」と叫び、「兵器の群をながめては」「だだ、だだ」と叫ぶという。そうすると「だだ、だだ」は銃砲類の発射音か、炸裂音をまねたかのように聞こえるが、しかし実際は「センソウだ」「戦争だ」と叫んでいるのではないか。そう叫んでいるのだけれども「センソウ」「戦争」は声にならない。ふにゃふにゃした声で、ことばにならない声で「セセンソウだ」「戦争だ」というものだから、聞こえるのは「だだ、だだ」という叫びばかりである。なぜ「戦争だ」といえないのか。そういったらいいではないか。だが「不便な肉体」「どもる思想」は、「だだ、だだ」といいよどんでいる。この詩で作者は誰を揶揄したのか。「一匹の詩人が紙の上にゐた」というのだから、多くの詩人たちといってもよいが、しかし作者は、むしろ知識人というもの全般をさしていただろう。知識人の懐疑の精神が「戦争だ」と発音できない状態を、おそらく揶揄したのである。（略）作者は多くの知識人たちに「戦争だ、戦争だ」といわせたかったのだろうか。それも「反戦だ、戦争反対だ」とい

わせたかったのだろうか。この詩はどちらとも受けとれるし、そのあいまいさで、私どもに「君はどちらだ」と問いかけてくる。山之口貘はどうだったのか。作者は何もいわない。何もいわないが揶揄している。おそらく誤ちなく、山之口貘は腹の中で「戦争はごめんだ」と思った。だが軍事権力の支配のもとで「戦争はごめんだ」とはいえなかった。いえば投獄である。だから山之口貘もこの詩の中で主語の「戦争はごめんだ」を発音しないで、そこらの誰彼と同じように「だだ、だだ」と叫んでいるのである。（傍線松下）

伊藤信吉氏の評[4]。およそ氏の指摘どおりであろう。〈不便な肉体〉と〈どもる思想〉、むろんこの両者が一篇を貫く重要な詩的モティーフである。特に、言葉の指示機能を喪失した発語としての吃音がその実質とは裏腹にきわめて効果的な音素となって詩的空間を支配している。まさしくそれは時局便乗型の知識人に向けて発せられた警報音といってもよい。ただ、全てにわたって氏の評を容認するわけにはいくまい。上記傍線部を見られたい。詩意に沿って考えた場合〈一匹の詩人〉を《多くの詩人》すなわち《知識人というもの全般》と解するには多分に無理があろう。思うに貘が《揶揄》せんとしたのは《知識人》ではなくむしろ己自身ではないか。わたくしは作中の詩人は貘その人だと見たい。貘は己れで己れを鋭く揶揄する。かかる鋭い切っ先を自分に突きつけることによって貘はかろうじてこの忌まわしい時局と対決しているのだ。〈不便な肉体〉〈どもる思想〉――ペンを片手に〈紙の上〉ですべなく言い澱んでいるのは紛れもなく貘自身であろう。

初連で体制側の人々が、次連でそれに追随していない〈一匹の詩人〉の存在が、それぞれ明らかにされる。詩人は〈群れ飛ぶ日の丸〉や〈さえずる兵器〉を眺めてはもどかしそうにドモリを繰り返す。ここには〈みんな〉という集団的存在と〈一匹〉という社会的枠組から離れ孤立した存在とが作品の対立的構図としてはっきり設定されている。であるならば明らかに〈一匹の詩人〉は他に置き換えのきかない存在として作品世界に確固たる位置を占めていることになろう。と同時にこの〈一匹〉は〈発育不全の短い足〉〈へこんだ腹〉〈持ち上らないでっかい頭〉の体貌も持つ。つまり負性の肉体と消極的な精神性とを所有した存在として登場していることになる。おそらくかかる造型の背後には積極的に戦争批判できない腑甲斐無い己れへの鋭い突きつけが込められているに相違ない。だからこそ彼は〈インクに渇いたのどをかきむしり熱砂の上にすねかへる〉偏屈な態度を取ったりするのだ。〈すねかへる〉という表現がこの場合いかに重いか、われわれはその言葉の重みを十分に汲み取る必要があろう。ダダをこね、強情を張り、斜に構えた態度。貘の営為は常にこの地点から始まる。伊藤氏の別評を次に引こう[5]。《山之口貘の詩的世界は、その殆どが低音部からの発声である。自分を人生と社会の低いところへ置き、そこから体験に裏打ちされた声を発する。この低音部からの発声が、一つの面で庶民的な、社会の下積み階級の声につながる。低音部からの発声は、論なく権力的なものの権威的なものに背をむける。それが斜視の人生論を形成する。斜視の人生論はそのどこかに批判的認識を付帯する。それが現実感覚、庶民感覚となって作品を深め、世をすねたような、独特の人生的視野を形成する》。もはや贅言を要すまい。「紙の上」はまさに伊藤のいう《斜視の人生論》によって創造された作品といえよう。権威と権力を斜に見、己れをも斜に見ながら庶民の立場に立って思考し訴える。時に自身を一匹の拗ね者となす。ダダをこね、強情を張り、斜に構えるのである。ねじれた精神、ねじれた肉体。意識的であるがゆえになんとも痛ましい。しかしながら、だからこそ訴える力もま

た大きいと言えるかもしれない。幸福なだけの人生論が空々しく思われ肉感に欠ける人生論がいかにつまらないものか、それをわれわれは体験的に知り得ているはずだ。総括すれば貘は時局に対しても己れに対しても常に斜に構えていた、といってよい。が、これはネガティブな態度では決してない。むしろ逆だ。斜に構えることで貘ははっきりと自己を主張する。かように見てきた場合この一篇は己れを鋭く抉剔することによってのみかろうじて忌まわしい時局と対決していることを実感でき得る反権力者の主体性確保の鮮やかな実践と呼べる。

確かに貘は反戦の思想は持っている。「紙の上」とほぼ同時期の詩作「加藤清正」「鼻のある結論」「夢を見る神」「弾痕」など支那事変下に創作された作品群を通覧すれば容易に了解できることであろう。〈ある日／僕は文明をかなしんだ／詩人がどんなに詩人でも　未だに食はねば生きられないほどの／それは非文化的な文明だった／だから僕なんかでも　詩人であるばかりではなくて汲取り屋をも兼ねてきた／僕は来る日も糞を浴び／去く日も糞を浴びてゐた／詩は糞の日々をながめ　立ちのぼる陽炎のやうに汗ばんだ／あゝ／かゝる不潔な生活にも　僕と称する人間がばたついて生きてゐるやうに／ソヴィエット・ロシヤにも／ナチス・ドイツにも／また戦車や神風号やアンドレ・ジイドに至るまで／文明のどこにも人間はばたついてゐて／くさいと言ふには既に遅かった〉（「鼻のある結論」）。痛烈な文明批評である。けれども振りかぶったそれではない。北川冬彦氏が指摘するように《汲取り屋の鼻の嗅ぎ出した》《肉体化された批評》といえる。(6) 換言すれば〈不便な肉体〉が拗ね返って嗅ぎ出した評となるか。時局に対する貘の態度は常時かようなものであった。それは貘に限らず全ての人々が自身の存在基盤を喪失しつつあった時代において一様に取らざるを得なかった必然的な態度なのであった。

Ⅲ　詩人便所を洗う

資料で話題になっているのは次の部分である。

人夫の井ノ上君と堀下君とが、おわい屋さんの長い柄杓を借りて、腐敗槽の中を汲み取りはじめた。おわい屋さんが、空タゴをマンホールの際に持って来ては、汲み取った奴を表へ運び出す。エスはまた、僕を物蔭に呼び寄せて耳うちした。表に運んで行ったタゴをそれとなく調べて呉れと言うのである。ずるいおわい屋さんになると、空っぽのタゴを混ぜて置いて、汲み取り荷数をゴマカス者もあるという。僕は表に立っていて、おわい屋さんが出て来るとあっちを向き、引っ込んで行くと腰をかがめ、手の甲でタゴを叩いて見た。詰っているものはココと鳴って、空っぽのタゴはカカと鳴るように感じるのだった。

浮渣を汲み取り、液層を汲み取ると沈渣の汲み取りである。堀下君が、バケツと麻縄でつるべをつくった。井ノ上君は、腐敗層の中へ降りるためにボロボロの合羽に着換へ、縄帯を締めて、鉢巻を頬被りにした。堀下君と僕とは、井ノ上君の手首をそれぞれ持って、かきみだされたばかりのむんむんしているその中へ彼を降したのである。どろどろに砂や石っころなどを黒く染めた沈渣を井ノ上君がバケツに汲み取ると、それを引き揚げる役は堀下君と、ついに僕なのである。ふたりはかわるがわるバケツを引き揚げては、沈渣をタゴの中へあけた。何度も何度も繰り返しているうちに、腰は痛んで伸びなくなり、腕の弾力はあべこべに伸びてしまって、バケツの昇降が鈍って来る。スラブの上には泥色の汚物がこぼれて来て、踏張

り立っている足を型どった。汚物にぬれてすべり勝ちな麻縄。すべり落ちようとするバケツを、はっとして引き揚げる途端に、マンホールの縁にそれがぶつかる。はずみをくらった汚物の飛沫どもが飛びつく頬。額。おとがいなのである。

大腸菌も掘下君も、詩人もチフス菌もコレラ菌も井ノ上君も、みんな蛆を真似ているようだ。それでも、飛び出す声をきけば人間らしく、こぼすなようと呶鳴って来た。穴の中を見ると、井ノ上君の後頭部、襟首のあたりから、合羽の背中一面べっとりだ。

沈渣が残り少なくなって柄杓で汲みにくくなると、今度はゴミトリで掬いはじめる。掬った汚物は直ぐにはバケツの中に移さない。一応、井上君は、ゴミ取りの上の汚物を指でひっかき廻し、丹念に改め、それからバケツに移すのである。便所の落し物がみんなここに流れ込んでくるからである。十銭銅貨が1枚、焦色になって出て来た。金入の口金も黒くなって出て来た。それを見ながら掘下君は、紙幣もはいっていたんだろうが腐っちゃったんだろうなあと嘆息した。万年筆も出て来た。其の他、あのゴム製品が、幾つか出て来たのである。その度に掘下君は、女みたいな奇声を発して、あらま、と言いながら、バケツの中からそれをつまみあげてまじまじと見るのであった。

沈渣をすっかり汲み取ると、井ノ上君は、亀の子ダワシを以て層内の壁をコスリはじめる。ぼくは、ホースの水をほそめにして、井ノ上君の亀の子ダワシを追っかけるように水を流す。壁にくっついていた瘡蓋のような汚物が剝げ落ちると、ようやくセメントの壁らしくなる。洗い汁が溜ると、それをまたポンプで汲み出すのである。その時、出し抜けに、駄目ですよと井ノ上君が叫んだ。中をのぞいて見ると、なるほど、たったいま出て来たばかりであろう、彼のふくらはぎあたりには生々としているまでに新しい糞が浮いていたのである。洗い汁を汲み出してしまえば、腐敗層の掃除は終りである。だが、井ノ上君は、いま暫くの間は中にいなくてはならない。その間に、僕はそこの家人を案内して来て、掃除の検査を受けるのである。きれいに汲み取りましたから御手数ですけれど一度奥様に御目通し願いたいんですが、と女中さんから言わせると、お前見て来いとおっしゃる奥様は殆どないと見え、奥様方はきっと御自分で出て来る。そうしておっしゃるには、まあこの中に人が這入っているのね、とくるのである。中にはまるでおびえるかのように、御苦労さま御苦労さまと繰り返すごとに後退りして引っ込んでしまう奥様もある。もっとも、エスが傭って来たおわい屋さんだって、糞の中へ降りてゆく井ノ上君の姿を見た時は、おのれを忘れるくらい顔負けしたらしく、へえ、と一言いって、唖然としていたのである。

（略）

予備濾過槽には砕石がある。この砕石を一個ずつ、僕らはスラブの上に取り出した。ぬるぬるぬらぬらと、砕石にくっついている汚物を、一々タワシをかけて、洗い落す。やがて、石らしい顔形になると、それを元のように槽内に詰めるのである。

次は酸化槽。ここには鉛樋がある。鉛樋には適当な勾配がついているので、足で踏んだりなどしてはいけない。只、ホースの水で樋の中の汚水を洗い流し、ゴミをすっかり無くしてしまう。鉛樋の下の砕石は、矢張りタワシをかけて洗うのである。

次は消毒槽。ここは、所謂、浄化された汚水が槽底を流れているだけなのであるから、槽底に落ちているゴミを取り除き、水で内壁を洗い流し、消毒薬入を洗って、カルキを水に溶かして一杯入れて置くのである。

（詩人便所を洗う）

汚穢屋が汚穢屋を雇うこの矛盾。利害に関わる同業者同士の微妙

な駆け引き。腐敗槽の上と下で演じられる悲喜劇。まるでコメディー映画を見ているような滑稽さである。まさに貘の真面目、筆の冴えが感じられる文章であろう。

貘は、当時、あるビルの空室でさながら〈寄生虫〉のような生活をしていた。かような生活が可能であったのはそこの管理人と十数年来の親交があったためなのだが、しかし、当然ながら彼は貘の無銭無為徒食の生活を快く思ってはいなかった。そこでかかる実生活を逆手に取って仕手のない汚穢屋の仕事を半ば謀略的に貘に押しつけたのがことの始まりらしい。業務はビルの一室に「佐藤衛生工務所」という尤もらしい表札をつけることから始まる。出資者である管理人の名前を掲げたのである。と同時に営業主任の肩書を印刷した偽名刺（山口英三）も作り、また開業の案内状も五、六百枚印刷する。給水・下水・給湯・水道衛生工事・浄化槽新設・浄化槽掃除消毒薬槽見廻・水洗放流切替工事・設計並監督など多種の営業課目を刷り込んであった。が、実際に営業可能であったのは浄化槽掃除のみ。汚穢屋でござい、と正面切って売り込むと体裁が悪いし営利面で支障をきたすのではないかという経営上の深慮が働いてのことである。仮りに浄化槽掃除以外の仕事を依頼された場合は替わりの工事夫を探し出してきてそれに又依頼するという算段であった。なんとも羊頭狗肉的開店である。ともかくかかる内容の案内状を浄化槽所有者に発送する。待望の依頼状が舞い込んできたのは一週間後。依頼主はある外科医院であった。手順どおり手押ポンプ・バケツ・亀の子タワシ・ブリキ製のゴミ取り・柄杓・麻縄・サクションホース・ゴムホース・塩酸・カルキなど一式取り揃えて早速現場に向かう。朝九時出勤。家人の朝メシを配慮しての出勤だった。引用文はその後の作業風景を描写した部分である。およそ誰もやりたがらない仕事であろう。畸人、変人と称され爾後このたぐいのレッテルが貘の頭上に冠されるに至ったゆえんである。自業自得とはいえあまりにもそれは不幸な呼称であった。次に引く藤島宇内氏(7)の評はその不幸をストレートに語っていよう。

《戦前は、詩人という人間は風変りに見られるのが日本では常識で、また事実、風変りな人が多かったようだが、戦後はよほど事情が変った。その詩ばかりでなく、その日常生活の風変りなことによって何かを表現しているというような人物は、もはや現われなくなった。いまでは詩人と称して現われる人も、その生活ぶりは常識人になっている。そうなったことのよしあしの判定はまだついていないのがいまの時代だ。――ところが戦前の風変りだった詩人たちのあいだでさえ、「あれは変っている」とか「放浪詩人」とか妙なレッテルを貼られていた一人の青年があった。それが山之口貘さんだった。（略）このような貘さんに対する単純な見方というものが、一般には受け入れられやすいものだったのだろうと私は思う。だが残念なことは、それが戦後、現在に至るまで尾をひいていることだ。もちろん、このような詩、そのような見方は善意好意から発している。それだけに問題としてはむずかしいものが含まれているのだ。「風変りな詩人」「放浪的詩人」「諷刺詩人」「生活的詩人」――この人ほどにその力量をみとめられながら、この人ほどに多くの誤解の眼をもってこの程度の浅薄な解釈をうけてきた詩人は、日本の現代詩の歴史においては、ほかに例がない。少し大げさにきこえるかもしれないが、貘さんは「日本の悲劇的な現代史の罪業」によってごかいをうけてきた詩人なのではないか、とさえ、いまの私は考えている。その現代史とは、どこかの本に書かれてある現代史ではない。私たちの一人一人がその中において生きてきた、そして生きている日常の歴史である》。貘に対するわれわれの誤解を《日本の悲劇的な現代史の罪業》とまで極言する氏の嘆きは強烈に強い。し

かし一面仕方のないことかもしれない。一度貼られたレッテルは容易に剝げないし無責任なわれわれはそれを面白がって眺めているだけだ。ただ、氏の評から三十年以上経過した今日、もはや氏の嘆きが杞憂になりつつあるのをわれわれは承知している。貘の作品が確実に現代詩の中で重要な意味をもつに至ってきたからである。

○

実は当資料の存在は小説「第四『貧乏物語』」（「中央公論」昭26・12月号）中の記述によってすでに明らかにされていた。[8] にもかかわらず従来まったく顧みられなかった。むろん思潮社版全集にも収録されていない。編輯者の怠慢といってしまえばそれまでだが資料的価値がさほど高くないという判断が働いてのことであろう。だが、わたくしとしては等閑に付せなかった。資料の背景を無視するわけにはいかなかったからである。中心を資料の時代背景に絞り叙述してきたゆえんである。満州事変から太平洋戦争突入まで時代の暗雲がそのまま庶民の実生活を決定していった状況の中で人々がいかなる心的状況に立たされていたか。当資料はその状況を如実に語っていまいか。場の騒擾と奇態はなべて時代のそれであろう。かかる時代の中で貘はどのような態度を取っていたか。斜に構えること、それが彼の処世術であった。ただ、かような身構えがときに誤解されたのは不幸なことであったといわねばなるまい。その不幸を雪ぐこと。そして正当に評価すること。それがわれわれに与えられた課題であるのだが前述したようにかかる心配は今や不要になったといっていいであろう。

註

（1）資料には出席者六氏の写真が掲載されている。また、出席者についての紹介記事も付されている。転載しよう。（木村太郎――有名なイカモノ喰ひで、蛆虫毛虫は云はずもがな、眼にふれるものはみんな喰ってしまふ。元築地小劇場の俳優。黒川一――潔癖が亢じて病的となり、何でもかんでも「汚ない〳〵」と云って自分でも困ってゐる。現在松竹本社々員。山形天洋――お巡りさんから弁士に転向したといふ活動写真華やかなりし頃の人気者、今はときどき映画へ出たり、保険の勧誘もやってゐる。山之口貘――沖縄出身の詩人で、灸術師、高利貸の手代、売薬行商から便所掃除人までやったといふ変りだね。宮坂普九――往年の河童のフクさん、居候を愛し、その多くの居候を養ふために十数種の商売をしたと云ふ。サトウ・ハチロー氏の親友）。

（2）江口圭一『盧溝橋事件』（昭63・12・岩波書店・岩波ブックレット　シリーズ昭和史　3）37頁参照。

（3）『新潮日本文学アルバム　吉川英治』（昭60・8・新潮社）44頁上段写真参照。

（4）『現代詩鑑賞講座8』（昭44・7・角川書店）200～201頁。

（5）註4に同じ。184頁。

（6）『詩の話―現代詩とは―』（昭31・10・角川文庫）114頁。

(8)　(7)

「うむまあ木の背景」（昭33・10・「歴程」67号）3頁。

小説中の叙述によるとこの座談会企画は貘にとって甚だ迷惑なものであったことがわかる。資料中の貘の発言からそのことは一層明瞭になるであろう。思うに貘は談論風発の雰囲気の中で周囲の状況にあわせて己れの恥部を已むを得ず語っている。当該箇所を引用しよう。〈「中央公論」に「詩人便所を洗う」という随筆を書いたが、これは、題名の示す通りの内容のもので、結婚前に、直接ぼくの経験した衛生屋としての仕事ぶりを書いたのであった。これには、糞尿に囲まれていたぼくの前身がまる見えなので、女房が読むと困ることが起きてしまうのではないかと気にしながら、金を欲しさに、おそるおそる書いた次第なのである。（略）ところで、「詩人便所を洗う」の影響は、文芸春秋社にも及び、雑誌「話」の風変りな人達の座談会にぼくは引っ張り出された。一応、ぼくは畸人ではないのだからと、辞退はしたのだが、まあまあそう云わずにと来られて、ついのこのこと日比谷の山水楼に行ったのであった〉。

（一九八九・三月稿）

――九州大学大学院博士課程――

資料

自分で持余す病的な潔癖ー おわい屋がおわいを汚ながるー浜口首相が斃れた瞬間ーとんだところで親不孝の言訳ーイカモノ喰ひの弁ー芋虫だけはこりこりしたー自分の胃袋を信用せよー水掃便所綺譚ー親子二代の奇人伝ー東京の真中で孔雀放鳥会ー随分粋なお巡りさん

自分で持余す病的な潔癖

木村　今夜はいったい、どういふ座談会なんですか。

記者　まア、かう申しあげては失礼だけれども、たとへば木村さん、あなたの有名なイカモノ喰ひとか、黒川さんの潔癖とか、ともかく皆さんは変った特色をもって居られるので、そのいろ〳〵変った経験なり、珍しい生活なりを、覗いてみたいと云ふのですよ。ですから一つ、ざっくばらんに話して下さい。ところで松井翠声さんに、今夜の司会をおねがひします。

木村　僕はイカモノ喰ひではありませんよ。どうもこれを誤解されて困るんだが、これには一つの説があるのですよ。

松井　まア〳〵それは後ほど伺ふとして、ともかく皆さんは、なみの人間より変ってゐるといふことになってゐるんだから、（笑声）いろ〳〵質問して、お話しを伺ふ事にしませう。

記者　私、先ほど黒川さんに名刺を差上げたら、他の名刺をくれとおっしゃるんですよ。驚きましたね、名刺を畳の上においたのがお気に入らないんです。（笑声）これほど御潔癖とは思はなかったものだから肝をつぶしましたよ。先づ、黒川さんの、その潔癖から伺ひませうか。

松井　黒川さん、あなたの潔癖は、そも〳〵いつから始まったんですか。いとけなき頃からですか。

黒川　さうです。子供の時からださうですよ。
宮坂　へえ、それはまた、さぞにく〳〵しい子供だつたでせうな。
（笑声）
黒川　子供の時からすべて物事をキチンとしたがる習慣だつたのですよ。今から考へてみると、これがそも〳〵原因なんですな。
考へてみると私位、不幸な者はないと思ひますよ。その潔癖を、こゝですつかり話したらきつとびつくりするでせうな。
松井　我々も変つてゐるが、あなたがどの位変つてゐるか、それをすつかり、お聞きしたいものですね。
黒川　あなた方の潔癖は常識的だが、私のはもう、病的で非常識ですからな。例へば今夜のやうに風があると、紙屑がとびますね。
あの紙屑には、路に吐き捨てゝある痰なんかゞついてゐるかもしれない。さう思ふと、それがひどく気になつて、自動車からこゝの家の玄関へ這入るまでの、僅かな間もハラ〳〵する始末ですよ。もしその紙屑がズボンの先にでも触つたとするとさア大変です。そのまゝではゐられない。帰つてからベンヂンで拭くとか、洗濯屋にやるとか大騒ですよ。それを我慢すると寝ても寝られない。それを我慢してゐる間は、こゝでかうして人と話をしてゐても不愉快でたまらないといふ風なんですよ。それでどつか御気分が悪いのですかと、しつゝこく聞かれるやうな場合も度々ある。（笑声）
木村　「この下駄にお触り下さるな」と書いた札をいつも懐に入れてゐて、よそへ上つて下駄をぬぐ時のせて置く人がゐるさうですね。
黒川　そんなのは私から見たらまるで小学生みたいなもんですよ。
（笑声）

おわい屋がおわいを汚ながる

木村　潔癖と云ふのは何ですね。綺麗好きの、何でも綺麗々々が亢じて、どうにもならなくなるんですね。これとあべこべに、汚ないこと、汚ないことが重なれば、自然となほるんぢやないんですかね。僕の兄貴がやはり潔癖だつたんで、僕はこれを何とかしてなほしてやらうと思ひましてね、一度兄貴の眼の前で、わざとゲロを吐いて、それを又喰べてみせてやつたんですよ。それつきり兄貴の潔癖はなほりましたね。（笑声）
黒川　（顔をしかめて、情なさうに）僕にはそんな事をしてくれる人がゐないんだからね。
木村　なアに僕と一緒に二週間もお暮らしになれば、すぐに治りますよ。
松井　そ、そんな事をしたら、黒川さんは一遍に死んでしまふよ。
（笑声）
記者　ところで、一寸念のために伺つておきますが、黒川さん、あなた食事の時に汚ない話をされても構はんですか。
黒川　それは平気です。たゞ見た眼に汚ないものだけですね、厭なのは・・・。
松井　飯を喰つてゐる時に汚ない話をすると喰へなくなる人がゐますね。
山形　お百姓はさう云ふことに割合平気なもんですね。
黒川　私は、これはまア私の我儘で、これも私の生活が、楽になつたからぢやないかと思ふんですよ。
山形　大体潔癖と云ふのはさうですな。生活の楽な人に多いですよ。
山之口　ところがお百姓にでも厭がるひとがありますよ。浄化槽を掃除する時に、膝の辺まで浸つて仕事をやる、さう云ふ仕事に百姓を頼んでくると、この中へ這入るのですかと大変なしかめつ面

をして見せる。その百姓と云ふのが所謂おわい屋なんですよ。おわい屋が自分の仕事をしてゐる時には何とも思はないが、ひとの仕事を見ると汚らしく思ふ。これはちよつと面白いですね。

宮坂　さう云へば、乞食が潔癖だと云ふことは更に愉快ぢやありませんか。こんな事がありましたよ、私が浅草にゐる時分に、青空一家に信用がありましてね。（笑声）彼等が屑箱をギーバシヤンと開けて、バナヽを拾ひ出して喰つてゐるのをみた事があるんです。彼等はバナヽを剝くと一応ベロ〳〵と嘗めながら外側を捨てヽ、中にある芯のところだけを喰つてゐる。

黒川　（呆れて）乞食がね。

宮坂　もつと愉快な話もある。私の友人が豚箱で乞食と同室したんですよ。ところがその乞食が例の囚弁をあてがはれるとその上つ面を捨てるんですね。さうして中だけを喰つてゐたと云ふんです。して見ると何も物質に恵まれた人だけが潔癖とは云へませんね。

松井　性格ですね。

木村　つまり彼等は汚ないものを喰ひつけてゐるので、その汚ないものを、最も綺麗に喰べやうとするんでせうね。どん底の人々にもさうした希望はあるのですね。

浜口首相が斃れた瞬間

山之口　黒川さん、あなたその病的な潔癖をお医者さんに掛つて治さうとかなんとか云ふお気持はないんですか。

黒川　それはあるんですよ。で、一度そのつもりで、誰に相談しようかと思つてゐる時、ふとある雑誌で、Sと云ふ博士の書いたものをよんだのですよ。それで非常に感動した。親切によく書いてあつたんです。で是非この方に一遍お目に掛つて見たいと思つて、いろいろ伝手を求めて五六回会つたんですが、さうするとSさんは或雑誌に漫画入りで私のことを書いちやつたんだ。さうして最もかんじんな、最後の判断にはちつともふれてゐない。（笑声）それでSさんに訊くと、これは治ると云ふんですけれども、治す治さぬと云ふことは自分の心一つだと云ふ。それ位ならはじめからよく分つてゐるのだが、それが私には出来ないんだ。（笑声）

宮坂　それは治さぬ方がいゝね。治つたらきつと気持も淋しくなる。

山之口　それは治さうたつて、外側からでは駄目ですね。

黒川　それはさうだ、自分でその気にならなければ、駄目ですね。私は祈祷とか何とか云ふことは絶対信じられないたちなんです。

松井　こんなふうに自覚してゐる病人には叶はないですな。（笑声）

黒川　こんな話をしてもちよつと皆さん信じないかもしれないが、私はさつきも話したやうに痰とか洟とかが大嫌ひで、往来の紙屑が汚ないのはその上を擦つて来たのではないかと思ふからなんですよ。ところで私、いさゝか株券を持つてゐました。すると浜口さんが総理大臣になつた時に金解禁をしたもんだから、その株がさがつてしまつた。浜口雄幸といふひとは、私は人間的には大好きだつたが、そんなことで不愉快になつてゐると、浜口さんが、東京駅でやられたと云ふんですね、それを聞いた瞬間に、私がハツと思つたのは自分の好きな人がやられたと云ふ事ではなくて、その倒れたプラットホームにその時痰がなかつたかと云ふ事なんです。（笑声）

宮坂　こいつは嬉しいね。

黒川　さアさう思ふと、それが気になつて仕方がない、浜口さんがプラットホームに倒れた、そのプラットホームに痰が吐いてあつて、その痰が外套について、それがまた奥さんなんかに移りやしないかと云ふやうな事が、心配で〳〵仕様がない。（笑声）笑ひ事ではありませんよ。あのプラットホームには、また実によく痰

があるんだ。

宮坂　傑作だね、これは・・・。

黒川　私はこの事を思ひ出すと、未だに気になつて、仕様がない。

木村　その時痰はありましたよ。だつて、タンカ、タンカと叫んださうだ。（笑声）

とんだところで親不孝の言訳

松井　木村さん、あなたは随分いろんな物を喰べるさうですね。

木村　人は何を喰つてもいゝものなんだ。

松井　それでも大変のものを喰べるさうぢやありませんか。それを一つお聞きしたいもんですな。

木村　僕は喰べた事のないものは人間位のものですね、鼠、猫いらず、青酸加里まで、一通り噛つてみました。

黒川　（顔をしかめて）あなた鼠を喰つたんかね。（笑声）

宮坂　猫いらずを喰つたといふのは愉快ですな、どうです、木村さん、猫イラズはうまいですか。

木村　うまいものぢやありませんよ。あれを喰べると煙が出ますね、しかしこんな危ないものは、たゞたべてみるだけで、僕はいつでも危ぶないと云ふ時にはすぐ吐けるだけの習慣があるんですよ。

松井　成程、さうでせうね。ところで今まで喰べたもので、いか物中でも一番いか物といふのはなんですか。

木村　さア、一口にいか物と云つても、何を称していか物と云ふかこれが一番困つた問題ですね。味覚の上から、営養の上から、薬用の上から、この三つ以外の全然意味のないものを喰ふ事が、つまりいか物喰ひなんだらうと思ふのですが、それ以外のものは断じていか物ではないと思ひます。何でも喰へないと云ふものはない。喰へないと云ふのは、たゞ喰はないと云ふだけの事ですよ。

黒川　私はいか物どころではない、つひ二三日前に鳥を煮て貰ったんですがね、私は元来鳥の臓物とか皮付きとか、さう云ったところが好きで、それを家内がちやんと煮てくれた、その楽しみがあるから喰つたんですが、ふと円くなつて竹輪みたいになつてる奴を口に入れた。が、何だかへんなものだと思つて箸で出してみた、どうもこれは鳥の肛門らしいんだ。肛門かどうかハッキリは分からないが、変なものを喰つてしまったと、さア、これが気になつて仕方ない、ともかく大変なことをしてしまった、さつそく鳥屋に聞いて見なさい、と云つてる中に又そいつが出て来たんだ。オヤ、これは可怪しい、一つの鳥に肛門が二つある訳がない、それぢやアこれは肛門ではなかったかと、とたんに気が楽になったんです。だが待てよ、相手は鳥屋だ、鳥屋だから鳥が一羽といふ訳はない、さうするとやっぱりこれは肛門かな。（笑声）さアさう思ふと、また気になつて気になつて落着かない。鳥屋へ行つて研究してこいと云つて、家内を外へ出しましたよ。私はこんな風なので、つくゞ家内にすまないと思ふんですよ。

松井　これは一つ特筆大書しておかう。これを奥さんにみせておごらせる手がある。（笑声）

黒川　それについて、私がつくゞ思ふのは、こんな厄介な子に手古摺つた、亡くなつた両親と、それから、毎日私と一緒に同じ屋根の下に住んで、この変挺な性質を何とか理屈を云ひ乍ら見て呉れてゐる女房に申訳ない、すまないと云ふ事ですよ。私は女房にしみゞ感謝してゐます。

宮坂　とんだところでのろけましたな。（笑声）

黒川　いやこれはのろけではない。私が今、唯一つの願ひは、死ぬ時は、女房より早く死にたいと云ふ事です。さうして幾らか遺産を残して安楽させたい、私はこれが女房に尽す義務だと思つてゐる

のですよ。

宮坂　それはいゝね。ともかく、座談会に親不孝のお詫びやら、女房に申し訳ないと云ふやうなことが云へるのは、これはまつたく潔癖の徳だよ。（笑声）

イカモノ喰ひの弁

宮坂　木村さん、あなたは先刻、喰つた事のないのは人間だけだとおつしやつたが、私はこれで人間の血を飲んだことがあるんですよ。昔本郷にゐた時分に不良の徒を助けた事がある。それ以来此奴が私の通ひの権八（居候のこと）になつたのですが、やがて居付きの権八になつた。するとある晩の事、その男をやつ付けた連中から逆に仕返しを受けて私は路上で袋叩きに遭つたんです。這ふやうにしてやつと我が家に帰つて来て、水道にもたれて水を飲んでゐるところへ遅れて権八が駆けつけて来て、「遅かつた」と芝居模様よろしくありましてね。（笑声）彼は矢庭にグタ〳〵の私の体をかうしなければいけないと、揉みくちやに揉むんですよ。いや痛いの痛くないのつて、いゝと云つても聞かない奴なので私はこれでまたノビちやつた。（笑声）すると彼は活なんか入れましてね。どうするかと思ふと、短刀で自分の腕を切つて血を出した。人間の血と云ふものはあんまり出ないものですね、エイと云つて切るとポタ〳〵と落ちるが、すぐ止まつてしまふ、又エイと云つて切つてこれを飲めつて云ふんですよ。云ひ出したらきかない男なんで、仕方がないからのんだ。

とたんに思ひ出したのは、この男の股間にキズのあつたのを風呂屋でみた記憶ですよ。すると俄に気持がわるくなつて、ゲロ〳〵とチョコレート色のものを吐いてしまつた。私はこれでこり〳〵して、翌日そつと自分の家を家出してしまひましたよ。（笑声）

木村　人間のものでは私は瘡蓋を喰つてみたが、これはうまいものですね。

黒川　（いよ〳〵呆れて）へえ、あんた、瘡蓋を喰ふ？私はあれが落ちてゐるのを見て、その自動車に一年間乗りませんでしたよ。あなた今夜喰つたんぢやないでせうね。（気味悪さうにあとにさがる）

木村　今夜ぢやアありませんよ。御安心下さい。しかしあれはちよつと乙な酒の肴になりますね。（笑声）

記者　木村さんは便所の蛆虫を喰つてみせて私を驚かしたことがあるのですよ。

松井　へえ、あんなものに、なんか風味がありますかね。

木村　水で洗つて喰べるんですけれども、それでもプンとかすかな匂ひがありますね、くさやなんかあの匂ひは抜けませんね。それと同じことなんです。

宮坂　サトウ・ハチローがこんな事を云つてゐる、たき立ての御飯はうんこの匂ひがするつてね。（笑声）

木村　私はかう考えるのですよ。この非常時に何が喰へるとか喰へないとか云ふことは贅沢の極致ではないかと思ふ。

宮坂　成程、あなたのはつまり時代に即してゐるわけですな。

木村　いざといふ場合に、喰ふものがないからと云つてあわてないやうに、不断からいろいろの物を喰ふと云ふ訓練を正々堂々とやつて置くと云ふことは国民の義務ではないかと思ふんです。

松井　如何に義務でも蛆虫だけはね。（笑声）

芋虫だけはこり〳〵した

黒川　私などは何ですね、蝿が一疋飛んで来ても、それが何処から

飛んで来たかとすぐ真剣に考へる。

山形　蝿なんて奴はまつたく何処から飛んで来たか分らないからね。

黒川　私の家の表は、丁度向ひの家の汲取り口にあたつてゐるんです。だから私は土用中でも表に面した戸や障子は、絶対に開けさせない、これには家内がさぞ困るだらうと想像してゐるんですがね、いや、これは惚気でもなんでもない。

松井　そら、また細君のことが出た。（笑声）

黒川　私としてはこれが一番慚愧に堪へないのですけれども、まア理屈の上では鼻紙が触つてもなんでもない、それが為に生活を脅威されるわけでもなければ、病気になるといふわけでもないが、とにかく私は、理屈なしに嫌ひなんですね。つまり我侭なんだ。

木村　いや〳〵、我侭ではありませんよ。それがお嫌ひと云ふことはちやんと理屈にあつてますよ。人の髪の毛が御飯やなんかの中に這入つてゐると実に嫌やなものですからね。

黒川　私は女の髪の毛は嫌やぢやないね。男のちゞれた髪の毛が一番いやです。あれが這入つてゐるとぞッとするね。（笑声）

木村　とにかく髪の毛はいやなものですよ。ところがその髪の毛と云ふものは消化しないで胃に残るおそれがある。そして胃壁をきづゝけたりする。さうした大害のあるものは、ちよつとみたゞけでも厭なやうに、うまく出来てゐるんですね。胃壁に刺さつて胃癌の原因をなすやうなものは本能的に避けるやうに、うまく出来てるんですよ。痰とか洟とか云ふものは、黴菌が付随しますから、あなたがこれを避けるのは理屈にあつてゐるんですよ。

黒川　私は黴菌の存在よりもみた眼の色や、あの形が嫌ひなんです。

木村　それがつまり本能としての潔癖なんですよ。神様が人間に与えて下すつたものですよ。痰に含まれてゐる黴菌如きで俺は死なないと云ふ自信が出れば、その潔癖は意味がなくなるわけですよ。

松井　ところで、流石のあなたもこれには参つた。いか物喰ひでもこれだけにはへこたれた。これだけは二度ともう喰ふのをよさうと思つたやうなものはありませんか。

木村　いか物で何かうまいものはないかとよく聞かれるんですが、私は大抵生で喰つてしまふのです。それでいろ〳〵喰つてゐる時に、おい、これを喰へるかいと云つて友達が持つて来たものがある。こいつがとても凄い芋虫なんですよ。ナニ、こんなものと喰つてみたが、いやどうも、これにはまゐつた。

黒川　（きもをつぶして）えつあの芋虫を・・・。

木村　その芋虫を口に入れると、口の中でモグ〳〵動く。これは丸呑みにしてはいけないと思つてグイと噛んだ、だがこいつ弾力性があつてなか〳〵噛み切れない。それを無理に噛み切ると、忽ちあの青臭い汁が口一杯広がつてしまつて、いつたん呑込んだ奴をゲロ〳〵と吐いてしまひました。二度と口に入れるものぢやないと思ひましたね。（笑声）毛虫はまづいものですが、蠟燭かなんかで毛を焼いてしまひましてね、天麩羅にして召上つて御覧なさい、割合にいけるもんですよ。

黒川　とにかくどうも、これは大変な人と一緒になつたものだ。

木村　いや、あなた虫なんてものは、生きものですから清潔ですよ。誰が料理したか分らないやうなものよりずつと綺麗なもんですよ。

黒川　（つく〴〵呆れて）いや、あなたと私とはまつたく正反対の生活ですね。

松井　一緒に暮して、両方が参つたつてね。（笑声）

自分の胃袋を信用せよ

山之口　木村さん、あなたは実は食べ物に対して、遠大な気持をも

ってゐるんですね。しかしそれも食べ物が、生物だからではないですか、例へば瀬戸物を食べるとか、木綿の切れを食べるとか、さう云ふ方面には、なんか積極的なものはありませんか。

木村　私は煉瓦も噛つたし、皿もコップもたべますよ。ただ電球を喰べるのは、ちよつとコツがいりますね。

黒川　へえ、電球まで喰つちまふんですか。（と電球を見あげる）

木村　えゝ、何ならちよつと喰べてお目にかけませうか。

松井　まあ〳〵・・・。（みんなおしとゞめる）

山之口　お灸の方から云ふと、あなたのは体質ではないのですか。なにを喰べても差支へないやうに出来てゐるのぢやないですか。

木村　人間の胃腸と云ふものは元来凄いもんなんですよ。滅多に神様以外に作れない実に立派な機械なんです。こんな立派な機械を持ち乍ら、誰も一向自分の機械に自信を持たなさ過ぎるんですよ。

山之口　それはほんとに賛成ですな。

木村　誰も彼も自分と云ふものを甘やかし過ぎるんですよ。自分の胃を信用しなさすぎるんだ。悪いものをどん〳〵喰つてもいゝ筈のものなんですよ。それを体にいゝ物だけを喰つてゐると云ふことになれば、肛門なんかは要らないと思ふんだ。肛門は一体何の為にあるかと云へば、あれは不要な物を出す為にあるんですからね。皆さんも安心して、何でも、どん〳〵喰べるがいゝ。

松井　いやどうも恐れ入ります。（笑声）

木村　みす〳〵毒と分つてゐるものはいけないが、要するに人が喰つて、それは喰へると云ふことになれば、何でも喰はなければいけないんだ。気持が悪いから喰へないと云ふのはいけない事だと僕は思ふな。

黒川　私は綺麗だけれども毒なものと、汚ないけれど滋養になるものと二つ並べて、どつちを喰ふかと云へば、むしろ綺麗な毒になるものゝ方を喰べるね。

宮坂　あなた、それを治しては駄目ですよ。世の中からだん〳〵面白い人が少なくなつてゆくのに話の種がなくなつちまふ。あなたはまつたく珍重すべき存在だからな。

松井　では治さずに行きませう。（笑声）

水掃便所綺譚

記者　山之口さん、あなたはいろ〳〵な御職業をやつて来られたさうですが、何でも便所の汲取りまで、おやりになつたさうですな。いつ頃ですか、そのお話は・・・。

山之口　もう二三年も前ですね。或小さなビルディングの二階の空室に、私は寝泊りしてゐたんですが、冬も布団一枚しかないもんだからカーテンを引張つて来て、それを着て二年暮した。さうすると管理人が、気の毒に詩人は飯も喰へないと、同情して、かう云ふ仕事があるが、やる気があるか、と云ふんですね。だん〳〵訊くと、おわい屋ではないと云ふことを先づ前提として、衛生屋だと云ふんです。（笑声）しかもなか〳〵近代的な仕事で、リヤカーを引張つて浄化装置のある所だけを廻る。君は監督で人夫の仕事を見守つてゐてくれゝばいゝ、君を営業主任にするからと云ふことでしたから、よろこんでやつたんです。ところが愈ゝやつてみると、どうして大変な仕事なんだ。（笑声）

松井　何か珍談はありませんか。

山之口　珍談はありませんが、便所の中を何時までも溜めて置くと、とても澄んだ水が上の方に溜まるんですね、あの白い水が支那では薬ださうですよ。漢方薬のホルモンださうですね。よく見るとセルロイドみたいな、きれいな水です。

松井　不透明な白いきれいなものですね。支那ではこれを氷砂糖み

たいに噛ぢるんですつてね。（笑声）

黒川　その仕事を、今やつてゐるわけぢやないんでせうね。

山之口　だから三年位前の話ですよ。

黒川　（おそる〳〵）でもその着てゐる洋服はその時のぢやないでせうな。

山之口　ちがひますよ、そりやア・・・。（笑声）でもこの仕事は、黒川さんが嫌がつてゐる、潔癖ともつとも縁のある仕事ですよ。

黒川　そこでちよつと私に一言云はして下さい。私は朝便所に這入るのに真裸で這入らなければならないんですよ。それである家に泊つた時、水槽便所へ裸で這入つたわけなんだ。さてそこで便所をみると、右の隅の端のところにニツケルの棒がある。これを押へると水が出るのだなと思つてソツト押すとチヨロチヨロと水が出ました。同時に左の草履にとびのいて、今度は力一杯押したところが、一時に水が出て、その飛ばつちりがかかつたんですよ。（笑声）さアこれは大変だ。一体この水はどつちから出て来たんだらう。水の出口の穴の方から出て来たものか、それとも、小便が飛んで来たのか、さつぱり見当が付かない。ホト〳〵弱つて、なりふり構はず女中をよんで、実は水が跳ねたんだがいつたいこれはどつちの方から出たんだらうと訊くと、あなたのおしつこぢやないのですか、あなたの足の太股からズツト流れてゐますよと云ふんです。（笑声）それで或は小便かとも思つたが、よく〳〵考へると、便器から跳上がつてこゝまで来たものかもしれない、さうなると心配で、体の皮を剝ぎたい位に思ふんだ。それから四五日経つて又その家に行かなければならない用事があつたが、どうしても行く気になれない。あの水のとぶやうな便所に這入つたひとがその足で歩いてゐると思ふと、そこの畳が気味わるくつて、もう二度と行かれないんですよ。（笑声）

記者　黒川さん、あんたお宅でも、毎朝裸で便所へお這入りになるんですか。

黒川　えゝ、お湯が沸きましたと云はれて起きて、先づ便所に這入るのが二十分位。それから廊下を一遍真裸で拭いて、体をすつかり二三回石鹸で洗つて、それから始めてお湯に這入る。これがまア五十分と見て、二階に上つてちやんと坐つてしまふまで一時間は真裸ですね。今夜のやうに、かうしてお酒を飲んでいゝ気持になつて帰つても、よその畳を歩いた靴下が汚ないので、私の歩いたあとを家内が歩くと足を洗つて来いとどなる。それから、私の歩いたあとはすつかりお湯で拭くんですよ。湯殿で、その雑巾を洗つてゐる時も、家内を一定の場所にちやんと立たしておいて、絶えず見張りをさせるんです。その水が一滴でもお風呂の中に這入つたかどうか見てゐろと云ふんですよ、もし見てゐて貰はないと這入らなくつても、這入つたかも知れぬと、余計な心配をしなければならぬ。さうすると朝までよく寝られない。寝汗を掻いて夢を見る。汚ない夢でもみようものなら、うなされて大きな声を出す、これがまた近所にまで聞へるといふ騒ぎなんです。（笑声）

親子二代の奇人伝

松井　ところで宮坂さん、あなたも奇人だが、あなたの御子息はあなた以上に奇人ださうぢやありませんか。それを一つ話して下さいよ。

宮坂　そいつは一つかんべんして下さい。

松井　かんべんしませんよ。お父さんも勇ましいのですが、何しろこの親父が驚いてゐるのですからね。俺の倅は大変な奴だわいとしみじみこぼしたんですからね。

宮坂　何しろあなた、幼稚園で三度も停学を命ぜられましてね、わ

しはこの悴の為に三度も引越しをしましたよ。無茶苦茶の野郎でしてね、何といふか、非常に復讐心が強いんですね。その上にコスモポリタンでありまして、我家とよその家との区別がない。午後三時と云ふ時間になると、どこの家の前にゐようが、その家に飛込みましてね、おばさんお八ツを頂戴と云つて這入つてつちまふ。（笑声）そこの家では何処の子供だか分らないが、仕方がないからお八ツをやる、もしお八ツを呉れなかつたりしたら大変だ。四つ、五つの仲間がをりましてね、その部下をひきつれて台所から這入つて行つて、鼠入らずとか何とかから砂糖や塩やメリケン粉なんか出して来て、座敷中に撒き散らしてしまふ。粉をまくのが得意なんですよ。これがもし不成功ですと、下駄や靴を片つ方だけその家の前の溝かなんかに投込んでしまふ。そのたんびに弁償ですよ。近所からいろ〳〵な抗議が来ましてね、いやどうもいけませんよ。（笑声）悴の話はまア、これ位にしまして、ところで、親父の私には、夜業症と云ふ病気がある。これは十萬人に一人位の病気ださうですが、夜が更けて来ると働きたくなるんです。私は前世が石川五右衛門かなんかだつたかもしれませんね。昼間は何をするもいやで、夜になると何かしたくてムズ〳〵してくる。座敷をノコノコ片付けてみたり、こっちの箪笥を向ふにやってみたり、釘を打変へてみたりするんですが、これがだん〳〵亢じて来るとおもての仕事がしたくなる。（笑声）何しろ夜中なんですから、外に百燭光を二つ位付けなければならないのだから大変です。すると或る晩ふいに庭がつくりたくなつた。（笑声）翌朝になって家内や居候どもが起きて見ると、一夜のうちに池や噴水が出来上つてゐて、漫々と水がたゝへられ、金魚が悠々と泳いでゐたといふやうな事もあるのですよ。すると家内が、物をためるに具合がいゝから地下室をつくつてくれと云ひ出した。家内の考へでは、まさか地下室はつくるまい。まアかう云つたらこの悪い癖もとまるだらうと思つたらしいんですね。よからうつてんで、たうとう地下室をつくりましてね、飼ふものがないからこの穴倉で僕は蝸虫を飼ひましたよ。（笑声）

松井　自分の事よりもつと悴の話をしなさい。

宮坂　どうも弱るなア、これは・・・。幼稚園で何処かに石炭殻を敷いた事がある。するとその石炭殻に躓いて、その拍子に窓ガラスを一枚割つたんですね。一枚割つて先生にどうせ叱られるならと思つたんでせう、窓硝子を二百何枚みんな割つちまったんですよ。（笑声）実際窓ガラス二百何枚の弁償には弱りましたな。

松井　撃剣の道具をどうかしたといふ話もありますね。

宮坂　子供は無邪気なもので・・・。

松井　なにが無邪気だ。（笑声）

宮坂　私の悴の幼稚園では撃剣を教へてゐるんですが、悴の奴は打たれるのが嫌なんですね。悴の奴は幼稚園の園長さんをおばさんと呼びましてね、ほかの先生達はねえやです。（笑声）撃剣の先生はおぢさんなんですが、おぢさんきつと打たないか、打たなければやらうと云ふんで、やつたところが、あやまって打つてしまつた。さア、さうすると仲間を語らひましてね、お前打たれたか、俺も打たれたと云ふ調子で、撃剣の道具をみんな前の溝に流してしまつた。学校にある道具を全部流してしまつたんですよ、よくもやつたものですなア。（笑声）今度は一揃い幾らと云ふ撃剣道具を全部払ふんだからね、ガラスどころの騒ぎぢやありませんよ。（笑声）流石の親父もこれにはまつたく弱りましたね、そんな具合でそれで三度停学を喰らつたんです。ところがこんないたづらが五人居るんださうですが、ラヂオ体操をやる時、この五人だけ台の上に乗せられてやるんださうです。乗つかる子供は自分達が

一番上手だからだと思つてゐる、自分達は先生の側なんだから、勝手な真似をしてもいいと思つてゐるんですね、それで舌を出したりしてさんざん勝手なことをやる。すると下の子供がまた、あれはいたづらで乗つけられてゐるとは思つてゐない。だからやつぱり真似すればいいんだと思つて、みんな揃つて舌を出したりなんかする。（笑声）

松井　とたんに親父が呼ばれるんです。（笑声）

東京の真中で孔雀放鳥会

松井　宮坂さん、あんたは神田の小川町で、小鳥屋もやつたさうですね。

宮坂　えゝ、あれは震災で喰ふに困りましてね、私も何かやらうと思ひ乍ら、ふと考へたのは鞆樞兵衛の事なんですよ。この昔の侠客は札ノ辻辺で小鳥屋をやつてゐたといふ話だが、これはきつと粋な男にちがひない。さう思つたから小鳥屋になつたんです。何しろ私は昼過ぎに起きるんだから、大概の小鳥が死んでしまふですよ。当時私の店には居候が沢山ゐましてね、これが大抵美術学校の生徒ですがこの連中が朝学校に行く前に餌を磨つて行つて呉れるんです。しまひには面倒なので、この連中に商売を委せることにした。すると日曜は彼等の書入れ日なんですね、一円位の小鳥を二、三十円に売るかと思ふと、二三十円もした鳥を一円で売られたりしましてね。（笑声）まアどうにか算盤は合つたんだが、ある日私が起きてゐると、食膳に焼鳥が出てるんですよ。たべてみるとうまいんだ。ところが、これが、みんな店の鳥なんですよ。（笑声）それからたうとう今日は鳶にしようとか、今日は目白で行かうと云ふことになつちやつて、しまひにはカナリヤから文鳥、紅雀、セキセイインコと云ふことになつちやつて、あらかた喰つちまつたんだ。孔雀も一番ひゐましたが、雌が病気で死んぢやつた。すると丁度三月の事ですか、その頃生れた私の女の子の初節句と云ふことで、放鳥をしようと思ひたつた。そしてふと見廻した時に、残つた雄の孔雀が眼に付いたんです。これだ〳〵と檻を開けたが、孔雀の羽はもう十分に伸過ぎて立派なものです。それを店の前でパット放すと、暫しためらつてゐたがやがてさつと舞上つた。何しろ東京の真中で孔雀を放鳥するんですから、まるで桃山時代の豊臣秀吉になつたやうな気分で、見事ぢや〳〵と見上げてゐる中にひよつとこれが向きを変へた、縁があると云ふのは妙なもので又下りて来て電車のポールにやんはりと止まつたんだ。孔雀がとまつた事は知らずに電車は辷る。丁度花車ですね。（笑声）そのうちに、やア孔雀だと云ふので電車は止まる騒ぎです。あれはあの小鳥屋の孔雀だ、困るぢやないかと云ふやうなことで車掌がくる巡査がくる。仕方がない、その孔雀を捕へようと電車の屋根に上つたが、身嗜みのよい孔雀で悠然ととまつてゐる。その時、電車の屋根と云ふものがあんまり高いので驚きましたよ。電車の屋根から群集を見渡したのは恐らく私位のものではないかと思ひますね。（笑声）孔雀と云ふものは雉と同じく羽きが強いんで、こわいものだが、そこはともかくこつちも小鳥屋なんですからムンズとつかんで、逆さにして下りて来たが、アッと云ふ間に孔雀の羽がなくなつてしまった。見廻すとあつちでもこつちでも孔雀の羽をもつてゐる。羽根をぬかれてしまつたんです。ところが、そも〳〵この孔雀はもう売つてあつたんだ。それを忘れて逃してしまつたんですよ。それで、その盗られた羽を取返して来て、絆創膏で貼つたりなんかして、誤魔化した事がありましたよ。（笑声）

随分粋なお巡りさん

記者　山形さん、あなたは、巡査から弁士になつたんださうぢやありませんか。そのお話しを一つ。

山形　当時桜田本郷町に第二福宝館と云ふのがありましてね、そこに徳川夢声がまだ福原霊川と号してをりましたよ。

記者　明治何年頃ですか。

山形　明治四十四年でしたかね。私が二十二年生まれで二十二の時ですからね。・・・当時私は芝の警察に勤めてゐたんです。一日おきに非番で、非番の時は活動写真や寄席の一流のところに行つたものです。ところが、徳川夢声のゐた第二福宝館は売店のおばさんが美人でしてね、その美人を見るのも、活動を見るのも好きでしたからよく行つたんです。（笑声）すると何だか自分でもやれるやうな気がするんですね。それで徳川夢声にお前不良少年みたいだぞと云ふと、冗談云つちやアいけませんと云ふやうな事で、それから意気投合致しましてね、お互ひに往来するやうになつたんです。

彼が恋愛に悩んでゐるのをうまく解決してやつた事もありましたよ。

宮坂　随分粋なお巡りさんですね。

山形　その頃は警部補の試験に及第しましたが、実は弁護士になりたかつたんです。それには昼間学校に行くのだからよるの商売をしなければならぬ。当時活動は夜だけで弁士は相当の給料をとつてゐるさうだ、これがいゝと思つたけれども、見習いになるのは厭なんですね。

一人前になるのに二年も三年もかゝつては堪らないと思つて、夢声に相談すると、どうだ、秋田に行かないか、秋田の小屋で暑中休暇に頼まれたからと云ふんで、二人で朝日館と云ふその活動館に行きましたよ。ところが彼は風采が上がらないのに、私は聲など生やしてゐたし、お巡りさん上りで尊大振つてゐましたから、向ふでは私が主任弁士だと思つちやつて、「此度は」と云つて最敬礼をする。（笑声）これは翌日バレましたが、それで二月か三月で東京へ帰つて来て大学に這入りましたが、弁護士の試験には、二度とも落第致しましてね、遂に弁士となつたといふやうな次第です。

松井　弁護士と弁士では、護の字が一つ脱けただけぢやアないか。（笑声）

木村　しかし、山形さん、あなたはやつぱり落伍者ですね。

山形　どうして？

木村　だってごの字が落ちちやつた。（笑声）

黒川　（黙つて何か紙につゝんでゐる）

松井　黒川さん、あなた、何をしてゐるんですか。

黒川　いえね、今飲んだものゝ中に、何か舌にさわつたものがあつたんですよ。小さなゴミですけれども、これを家へ持つてかへつて、明日しらべてみない事には気がすまないんですよ。もしこれを忘れたりすると、自動車でとりによこしたりして、また一苦労です。（大切さうにゴミを包んでしまふ）

記者　それではこの辺で・・・。どうも今夜はお忙しいところを有難うございました。

付記

資料中の旧漢字は全て現行の新字体に改め、その際漢字のルビは全て省く方向で処理した。が、訓み誤る恐れのあるものには適宜ルビを付した。（資料は総ルビである）。また仮名遣いは原文のままにした。